

Crescendo

vol.124

M E D I K I T A R T S C E N T E R くれっしえんど

メディキット県民文化センター
MEDIKIT ARTS CENTER

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

Premium Select Concert#8

西の絃・ギター

～歌声と爪弾く調べ～

「マニフィカト」特別企画

大塚直哉×桐山建志 スペシャル対談

ニグリノード公演『赤桃』

邦楽ワークショップ

「Let's和の音♪」レポート



©ピクチャーエンタテインメント



©Toshiyuki Kohno

PSC#8 西の絃・ギター～歌声と爪弾く調べ～

「マニフィカト」特別企画



大塚直哉×桐山建志 スペシャル対談



「赤桃」(2010年/初演)

Special interview

世界が認める 宮崎出身ギタリスト 大萩康司 に聞く！



©ピクチャーエンタテインメント

大萩康司(ギター)

宮崎県出身。高校卒業後渡仏、パリのエコールノルマル、パリ国立高等音楽院で学ぶ。ハバナ国際ギター・コンクール第2位及び審査員特別賞受賞。2002年から4年間イタリアのシエナで開かれるキジアーナ音楽院でオスカー・ギリアに師事し、4年連続最優秀ディプロマを取得。その後、韓国、台湾、キューバ、カナダ、ロシアなど世界各地で公演を行い、いずれも好評を博す。ルネサンスから現代曲まで多くのレパートリーを持ち、ソロ、室内楽、協奏曲と幅広く取り組んでいる。新譜「天の三羽の鳥〜ギターで聴く珠玉のフランス音楽〜」(ピクチャーエンタテインメント)は「レコード芸術」で特選盤に選出。第6回ホテルオークラ音楽賞、第18回出光音楽賞受賞。洗足学園音楽大学客員教授。

高校まで宮崎で過ごされていますが、どんな少年・学生時代を過ごされましたか。

私は幼稚園から高校卒業まで小林市で育ったので、遊び場は山や川などほとんどが自然の中でした。ただ、小さいころは小児喘息だったので、動き回るとすぐ発作が出てしまい、そこでギターという遊び相手と出会いました。中学校では、ハンドボール部でゴールキーパーをしていて、九州大会で2位になるくらい強くなりましたが、ギターはそれに勝る楽しさがありどちらもやめられませんでした。体格や運動センスが問われるスポーツの道をあきらめたのは、九州大会の決勝で沖縄の中学校に敗退したときです。意外にあっさりと、音楽の道へ進む決心がついたのを覚えています。

高校卒業後すぐにパリに留学されていますが、10代で海外に飛び出て良かったなと思うことを教えてください。

実はもっと早く(15歳くらいから)日本を飛び出していたら、現地の言葉をもっと覚えられて、なんの誘惑もなく没頭できたのかなとも思います(笑)。海外に出ると、自分の意志を強く持っていち早く行動に移さなければ相手にされないという現実に直面します。それくらい厳しい世界なので、年齢が若ければ若いほどメンタルは鍛えられるでしょう。よかったことは、19歳からでもその場で生活させてもらえる環境があったこと。ただただ親に感謝です。

既にたくさんのCDを出されていますが、今回、デビューアルバムに収録されているブローウェルの「11月のある日」を演奏されますね。「11月のある日」はもともと同名のキューバ映画のために作られた曲です。人生への讃歌を謳った内容で、自分の演奏活動の最初の曲、いわゆるデビューCDの一曲目となった曲でもあるので、それはそれは思い入れも深いものがあります。名曲は何百回弾いてもやはり名曲だと思います。ぜひお楽しみに。

今回共演される波多野さんの魅力を教えてください。

私は波多野さんの周りを流れる空気にとっても魅力を感じます。それは歌手としても、お話ししている時もです。不思議なことに、波多野さんと一緒に演奏すると、その澄んだ声の横で私のギターは、いつも出している時とは違う音を奏でます。もちろん共演者によってそれぞれ違う音になるのですが、波多野さんとの場合は、まるで自分の中に眠っている部分を引き出してもらっている…という感覚です。

大萩さんの思うギターの可能性、楽器の魅力とは？

ギターの可能性はまだまだ未知数だと思います。サッカーの選手のように、ひと昔は少数だった留学&帰国組が、今では当たり前のように居て、どんどんレベルが上がってきているよう

に、ギター界でもどんどん素晴らしい生徒が腕を上げています。自分でも想像できないことが、これから次の世代で実践されていくのだと思います。クラシックギターの絶対的な音量は、オーケストラで使われている楽器よりも小さいですが、音色の多彩さはどの楽器にも負けないと思っています。それが、ギターの最大の魅力です。

今後の目標や大切にしたい活動などがあれば教えてください。

来年の5月に、3年に渡ってセルフプロデュースさせていただいた、ハクジュホール(東京)でのプロジェクトが一段落します。そして今度は大阪で新たなプロジェクトが進行中です。自分に何ができるかわかりませんが、自分を試すチャンス場だと思って、これからいろいろなことに挑戦していきたいと思っています。宮崎では、カウンターテナーの藤木大地君とここ数年やらせていただいている「ココから音楽」大作戦」も良い刺激になっています。

公演を楽しみにしている皆さんへメッセージをお願いします。

故郷の宮崎で、尊敬する演奏家とコンサートができる…このような機会を与えていただき、心から感謝の気持ちでいっぱいです。そして「歌とギターってどんなことができるの?」という好奇心を持っている皆さまには、是非!ひと目!見に聴きに会場へお越しください。その日にしかできない精一杯の演奏でお出迎えいたします!!



©K.Miura

藤木大地
(カウンターテナー／宮崎市出身)

(藤木さんは、2014年まで本誌にコラムを連載していただいていた。)

大萩さんってどんな人??

公私ともに大萩さんと交流のある藤木大地さんに、大萩さんの魅力をお聞きしました!

はじめて共演してから7年。おはぎ(大萩さん)ともずいぶん仲良くなりました。アーティスト同士の化学反応は、お互いが心を開き合えばより高まります。気心知れた仲間だからこそ生み出せるものがたくさんある。もうギター界の巨匠の入口にいるおはぎだけれど、その一方で、思いやりを持てる友人同士だからこそ実現できる音楽世界もあるのです。彼の、友人にふるまう肉の焼き方のうまさは、彼がどれだけ思いやりのある人物かを物語っているのではないのでしょうか。ほんとうに大事な仲間です。

Message 波多野睦美(メゾ・ソプラノ)



©Toshiyuki Kohno

詩人と歌う時

大萩康司さんを「ギターの詩人」と名付けたのは誰だったのでしょうか。大萩さんのギターは「爪弾かれる音」の中で、疑いなく最も純粋な響きです。そんな音に接するといつも思うのが「美しい音って、なんだろう」ということ。何をもって人は「美しい」と感じるのかな?という問いです。ヒトが何かを楽器として最初に使ったのは、モノを叩く太鼓かなと想像します。大萩さんの音の中には、ある種の「太古の昔の記憶」が鳴っているように思うのです。フランス留学で得た「洗練」はもちろん溢れているのですが、一方で、彼が生き物としてごく当然に「楽器と共存している」そんな響きです。そこに美しさを感じるのかもしれませんが。

私にとって特別な土地、宮崎で、大萩さんと演奏することはずっと以前からの望みでした。しかも「プラテロと私」。国境を越えて愛されてきた、このスペインの詩集の世界は、大萩さんのギターそのものです。スペインと宮崎の「二人の詩人」と過ごす幸せを、皆さんとともに味わえますように!

公演情報	
Premium Select Concert#8 西の絃・ギター ～歌声と爪弾く調べ～ 11月27日(日) 開場13:30 開演14:00 【会場】 イベントホール	
【出演】 大萩康司(ギター) 波多野睦美(メゾ・ソプラノ/歌、朗読)	
【曲目】 ファリャ：7つのスペイン民謡より ホタ/子守唄 ビゼー：ハバネラ～恋は野の鳥～ ブローウェル：11月のある日 ヒメネス/テデスコ：プラテロと私 (新訳による日本語朗読版/抜粋)ほか	
【料金】 全席指定 一般3,000円[会員2,700円] U25割1,500円 親子割3,500円(小・中学生+一般)	

オルガンとその仲間たちシリーズ2016
「Magnificat ～J.S.バッハを聴く悦び～」

特別
企画

大塚直哉 桐山建志

スペシャル対談



桐山建志
ヴァイオリン

大塚直哉
オルガン事業アドバイザー

東京藝術大学を経て同大学院修了、フランクフルト音楽大学卒業。1999年ブルージュ国際古楽コンクールソロ部門第1位。
現在、愛知県立芸術大学准教授、フェリス学院大学講師。

「オルガンとその仲間たちシリーズ」の企画監修を務める大塚直哉オルガン事業アドバイザーと、本シリーズの1回目から出演されている、アンサンブルのリーダー桐山建志さんの対談が実現しました。文系（大塚さん）、理系（桐山さん）で性格は正反対とおっしゃるお二人ですが、古楽をこよなく愛する気持ちは一緒のようです。お二人の出会いや古楽器の魅力などについてたっぷりとお話いただきました。

—— そもそもお二人の出会いのきっかけは。

桐山 長い付き合いになりますね。大塚さんが大学に入学した年だから、もう26年になります。生涯の半分以上ですね（笑）。
大塚 僕が大学（東京藝術大学）に入った時に、桐山さんは大学院の1年生で、大学の「カンタータ・クラブ」で一緒になったんです。

—— サークルでの出会いが運命だったんですね。

そのころから古楽の世界に？

桐山 大塚さんの学年は優秀で個性の強い人達が多くてね、ある時古楽の研究グループが立ち上がって、そこに引きずりこまれて（笑）。

大塚 僕たちが学生の時は、古楽器は特別な人がやるものという感じで壁があったんですけど、モダン楽器もバロック楽器も両方やってもいいんじゃないか、という空気が出てきて、そういうグループができたんです。当時、桐山さんはモダンのヴァイオリンでコンサートマスターを務めたり、ソリストとしてやっていける人なのに、空気を読まずに「バロックもやりませんか？」と声をかけたんです。

桐山 でもね、古楽器自体に興味を持ったきっかけはそれとは別にあって、小林道夫先生と一緒に演奏する機会をいただいた時に、小林先生の古い楽器のピッチに合わせて、モダン楽

器を半音下げて演奏したんです。その時に、半音下げるだけでも楽器の鳴りが全然違って聴こえるという発見があって、それから、弦をバロック楽器で使われる「裸ガット弦^{*}に張り替えたらどうなるだろう…、弓だけでもバロックの弓にしたらどうなるだろう…って、古楽器に興味が出てきたのはそのころですね。

—— 「オルガンとその仲間たちシリーズ」も今回で8回目です。続けてきて何か変化はありますか。

大塚 仲間は増えてきたなぁという印象はありますよね。宮崎に限らず、東京以外のところでは、まず古楽器をやる人も楽器も少ないし、古楽器アンサンブルができるようになるまでには、まだ10年、20年かかると思っていたんです。なので今回、宮崎・熊本・大分にいる弦楽器の人達が、古楽器でまじってやってみようかなと言ってくれたのは、とても嬉しかったですね。僕たちが大学の時もそうでしたが、とにかくやってみようという気持ちが大事で、たぶんそういうところから、少しずつ古楽の輪が広がっていくのかなぁと思います。

—— モダン楽器と古楽器の違いは大きいと聞きますが…。

桐山 弦楽器でいえば、大きなところは何も変わらないんですよ。ただ、弦のテンション（張力）がバロックのほうが低くて、魂柱（表板と裏板をつなげる棒）やバスバー（表板を補強する

部品）が細いので、楽器自体の余韻が豊かなんです。モダンの楽器に比べて強く弾くことはできないけど、バロックは人間的な響きというか温かいイメージがあると思います。ただ、演奏自体は、楽器に慣れるまで本当に大変だと思います。人によるとと思いますが、オートマ限定で車の免許を取った人が、初めてマニュアルを運転するという感じだと思います。

大塚 作曲当時の様式の楽器で演奏すると、作曲家がしゃべったり踊ったりした感じがそのまま自然に出るし、独特の軽さや躍動感があって、楽器がその音楽の本来の姿を教えてくれるという感覚があります。

桐山 弦楽器の場合、バロックの弓は弓先がずっと細くなっているの、均一に音を伸ばすということが苦手で、普通に弾くと自然に響きが減衰するんです。僕自身もバロックの弓を触ってみて初めてわかったことですが、同じことをモダンの弓でやるにしても、こういう風に演奏したらいいんじゃないかなぁというのは出てきますよね。

—— 桐山さんは今回、ソロで「シャコンヌ」を演奏されますね。

桐山 おそらく「メサイア」以外で、生涯で一番弾いている曲ですね。実は、小学校の時に、半ば強引に父から聴きなさいと言われた曲なんですけど、気付けば事あるごとに弾いています。大学の卒業試験の曲をはじめ、フランクフルトに留学して最初に弾いた曲も、初めて出したCDのタイトルも「シャコンヌ」でした。とても思い入れのある曲です。

—— 今回の公演タイトルにもなっている

「マニフィカト」も素敵な曲ですね。

大塚 「マニフィカト」は、マリア様が喜んでいるという曲なので明るくて幸せに満ちています。トランペットなどいろんな楽器を使って、いつもよりもカラフルに丁寧に盛り付けてある“おもてなし料理”みたいなところがありますね。そして、驚くべきことに1曲目から最後まで1つの文章になっているんですよ。そういう意味でも特別な曲です。アイザックスターンホールは反応がいいホールなので、古楽器のオーケストラならではの自然な躍動感が体験できると思いますよ。

—— 当劇場で初めて響く「マニフィカト」楽しみです。

読者の皆さまへひとことお願いします。

桐山 我々もまだどんな演奏会になるのかわかりませんが、今までの経験で、聴きに来てくれたら絶対面白いよ、満足してもらえるよ、という思いはあります。ぜひ聴きにいらしてください。

大塚 全体的におめでたい系のプログラムなので、何かいいことがあると思います（笑）。ただ、バッハの曲は、聴く側もエネルギーがいるので、そのつもりで体調を整えてお越しください。お待ちしております。

^{*}小林道夫…1933年生まれ。鍵盤楽器奏者、指揮者。バロック音楽への造詣が深く、特にJ.S.バッハの演奏解釈において高い評価を得るとともに、教育者としても多くの後進を輩出している。

^{*}裸ガット弦…羊の腸でできており、金属を巻いていない楽器。

出演者による古楽器紹介！

バロックトランペット



バロックトランペット



教えてくれた人

バロックトランペットと現代のトランペットを見比べてすぐわかることは、3本のピストンの有無と管の長さの違いでしょう。ピストンの仕組みがまだないバロック時代には、管の長さを倍にすることによって、全音階を演奏できるようにしていました。この管の長さによって含まれる倍音成分が多くなり、現代のものに比べて明るく華やかな音色が特徴です。特にトリルの煌びやかさはバロックトランペットの輝かしさそのものです。



教えてくれた人

森綾香さん
（オーボエ奏者）

バロックオーボエ・ダモーレ

オーボエ・ダ・モーレを直訳すると「愛のオーボエ」。18世紀後半以降忘れ去られていましたが、近代の技術により復興した楽器です。オーボエより3度音が低い楽器で、先端のベルが洋梨のように丸くなっているため、柔らかく優しい音色が出るのが特徴です。ダ・モーレは18世紀にドイツで作られたとされ、特にJ.S.バッハはこの楽器を好んで使いました。現代の楽器とは違い、ダ・モーレには2つのキー（3つある内の1つは左利き用のため、使わない時は埋めていた）しかありません。

バロックティンパニ



教えてくれた人

現代のティンパニは、音程を調整するためのペダルがついていたり、オーケストラで大きな音を出すために径が大きくなっていますが、もともとは馬の背に乗せて叩かれていたシンプルな楽器です。一対のティンパニで演奏曲のリズムと調性を支え、華やかさを演出します。ティンパニに張られているヘッド（膜）はヤギや牛の皮です。プラスチックのヘッドに比べ湿気や熱の影響を受けやすく調整が必要ですが、動物の皮ならではの豊かな響きとワイルドな打音が魅力です。また、木のパチを使用しますが、材質によって音が変わるので十種類くらいのパチを使い分けて演奏します。

公演情報

オルガンとその仲間たちシリーズ2016
Magnificat～J.S.バッハを聴く悦び～

12月17日（土） 開場14:30 開演15:00

【会場】アイザックスターンホール

【出演】大塚直哉[企画監修/指揮/オルガン/チェンバロ]
宮崎バッハアンサンブル
一般公募によるオーディションで選ばれたソリスト
オルガンとその仲間たちシリーズ合唱団

【曲目】J.S.バッハ：マニフィカト BWV243、管弦楽組曲 第3番 ほか

【料金】全席指定

一般2,500円[会員2,200円] U25割1,500円

親子割3,000円（小・中学生＋一般）

撮影場所は、新富公演の会場、新富町総合交流センター「きらり」！
今年4月にオープンしたばかりで、とても綺麗です。図書館や
カフェスペースもあって、観劇の前後にゆっくりできそう♪



おしえて！

立山ひろみ 演劇ディレクター

Q&A

0歳から入場できる親子向けの演劇公演は、劇場初の試み！11月、劇場と新富町の2会場で、演劇ディレクター立山ひろみのユニット「ニグリノード」の『赤桃』を上演します。その『赤桃』の作・演出を手掛ける立山さんに、作品への想いやクリエイターとして大切にしていることなどをお聞きしました。

Q.「赤桃」は、どうして0歳児も入場できる公演にしたんですか。

A.『赤桃』は、2010年に創った作品で、今回は再演になります。が、初演の時に観に来てくれた同級生が「子どもと一緒に来られるから、またぜひこういうのやってほしい。」とすごく喜んでくれて。小さな子どもがいるとなかなか観に行けない…という素朴な理由に、ハッとしました。いろんな層の人達が気軽に劇場に足を運べるという環境をつくるのが、こちら側の使命なのかなと思います。初演の時に、2歳児のお父さんから「うちの子は普段全然じっとできないのに、パフォーマンスを観ている間はずっと集中していて、何か引きつけるものがあつたんでしょうね。」とびっくりされていたんですが、親子で鑑賞することで、お子さんの新たな一面や個性を発見できる機会になればいいなという思いもあります。

Q.子ども向けや親子向けの作品をつくる時に大切にしていることは。

A.『赤桃』の時は、子どものことをもっと知ったうえで書きたいと思って、フィールドワークとして中野区の保育園に月2回通わせていただいたんです。子どもって天才だと思っていて、私の中では先生かな(笑)。子どもはルールに縛られないし、思いもよらない行動や自由な発想が神秘的だと感じることもあります。同じ舞台を観ても、大人はつい分かりやすい意味を求めてしまいがちだけど、子どもはそこで行われていることに感性を広げられる。子どもは頭がいいので、よっぽどいいものを創らないと見抜かれてしまうんです。実は、大人向けより難しい部分があるかも。子ども向けの作品をつくる時は、台詞で説明するんじゃなくて、台詞も“音”として捉えたり、身体表現、音楽、映像などを使って子どもの感性に訴えかけるということを大切にしています。

Q.立山さんのはじめての演劇(舞台芸術)体験は？

A.何が初めてかははっきり覚えてないですが、舞台に興味を持ったのは、中学の時ですね。たまたまテレビで宝塚を観てすごく面白かったんです。その時観たのは、天海祐希さんがレットパトラ役をされていた『風と共に去りぬ』だったんですけど。そのことを母に言ったら、すぐ観に行けることになって。今思うと、子どもが一度面白くと言っただけで、すぐ手配してくれるなんて理解がある親ですよ(笑)。それ以来、宝塚だけじゃなくていろいろな舞台を自分で探して観るようになって、舞台の向こう側に行きたいと思うようになったのも結構早かったですね。

Q.クリエイターの楽しさや大変さを教えてください。

A.作家の仕事は、素材を決めて、調べて、今上演するに値する作品を書くということが大きいと思いますが、演出家の場合は人それぞれですね。私自身が大事にしているのは、立山ひろみ個人がどんなに頑張っても可能性は有限だけど、まわりにいる役者や照明家、音響家、振付家、美術家などのクリエイターの才能が掛け算になっていくと、可能性は無限に広がるということ。みんなの才能を最大限に引き出せなかったら負けぐらいの気持ちで演出しています。最後の最後まで全員が納得する「一番いい」を追い求めるのは大変ですが、それが一番楽しいところでもあります。

*ニグリノード…立山ひろみの1人ユニット。パフォーマーの身体の動きや、音楽、空間、映像などの表現を担う要素のひとつひとつを丁寧に扱って、コトバ(台詞)だけ、物語だけに偏重しない新たな表現の可能性を模索。

ディレクター
立山Dの“ココ”に注目！

お子さんとぜひ気軽に会場に！いつの間にか一緒に巻き込まれるしかけをご用意して、お待ちしております♪子どもの頃の自由な発想や想像力は、大人になった時、きっと今を生きる力になる！！そんなひと時をぜひ一緒に♪

公演情報

ニグリノード公演 『赤桃』

【作・演出】立山ひろみ 【振付／出演】福留麻里(ほうほう堂) 【美術／出演】足立昌弥

【作曲／出演】高橋牧(時々自動) 【舞台監督／出演】河内哲二郎 *宮崎出身 【映像】西海枝良 【衣裳】坂本洋祐

【料金】全席自由 4歳未満：無料 4歳以上：500円 なかよしチケット：700円(4歳以上の2人1組、前売り券のみ販売)

■宮崎公演

11月5日(土) ①10:00開場 10:30開演 11:10終演
②12:30開場 13:00開演 13:40終演

【会場】メディキット県民文化センター 大練習室2

■新富公演 (「しんとみ生涯学習ウィーク」プログラム)

11月6日(日) ①10:30開場 11:00開演 11:40終演
②13:30開場 14:00開演 14:40終演

【会場】新富町総合交流センター「きらり」大集会室

※開場中にワークショップを開催します。ぜひ、ご参加ください♪

邦楽ワークショップ「Let's 和の音♪」



この夏、普段触れる機会の少ない日本の伝統楽器を“もっと身近に感じてほしい!”と、プロの演奏家を講師に招き、たくさんある和楽器の中から「箏」・「笙」・「鼓」・「笛」のワークショップを開催しました!本格的なお稽古から気軽に参加できるものまでコースは3つ♪たくさんのお子たちによるアツイ“和楽器体験”が繰り広げられた「Let's 和の音♪」の様子をお届けします。

たいけん密着!レポート

「はじめてのおけいこ」編

小学1年生～
中学2年生
計17名が参加

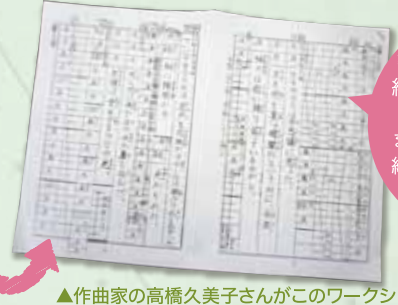
プロの演奏家からお稽古が3回受けられる「箏」の本格体験コース。ミニコンサートでは、箏・笙・囃子の演奏家とともにステージで演奏しました。



▲稽古初日!まずは座る姿勢・構えから学びます。
目の前にある楽器に触りたくてウズウズ…



▲初めてつける箏爪に悪戦苦闘しながらも、
箏の綺麗な音色に夢中の子もたち。

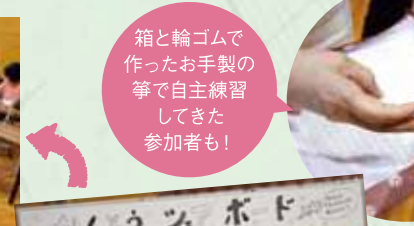


▲作曲家の高橋久美子さんがこのワークショップのために
作詞・作曲した「天の岩戸」にチャレンジ!演奏しながら
歌う伝統的な奏法「弾き歌い」は、慣れるまで大変です。

箏の楽譜(箏譜)は、
絃の番号が漢数字で
書かれています。
また、五線譜と違って
縦書きで、右上から下
に読みます。



▲お稽古最終日は、これまで練習してきた「天の岩戸」を、初めて
最初から最後まで通して演奏!「最初に比べると少し自信がつ
いてきて強い音が出せるようになった。」という頼もしい感想も。



箱と輪ゴムで
作ったお手製の
箏で自主練習
してきた
参加者も!



▲2回目は、低学年と高学年に分かれてのお稽古。参加者
同士で教え合う姿もみられ、子どもたち自身も上達を
感じているようでした。

本番



▲いよいよ本番の日。先生方から励ましの言葉をもらい、みんな緊張しながらも堂々と
舞台上に立ちました。最後までやり遂げた子ども達の笑顔は最高に輝いていました。



よくできました。

▲これまで教えてくれた講師の花岡先生と内藤先生から修了証が授与されました。「終わって寂しい、また来年も参加したい!」という嬉しい声も。

「かじってみよう!」編

「箏」「笙」「鼓」「笛」から1つの楽器を選んで
1時間お稽古ができるコース。



▲初めて間近で見る楽器に、皆さん興味津々。楽器の構造や楽器の
持ち方、基本的な演奏方法を丁寧に教えてもらいました。最後は
簡単な曲を一曲演奏できるほどに!

「ふれてみよう!」編

気軽にいろいろな楽器が試せるコース。



▲箏、笙、小鼓、笛すべての和楽器に触れてみる体験。どの楽器も人気
で、大人も子供もいろいろな楽器をちよつとずつ楽しっていました。

「巻末コラム」 ピアニストは才色兼備の蜜族だった

はじめに、その本の前書きをご紹介させていただく。「時にこの私自身をも含めてこのピアニストという種族について、(中略)洗練された現代の人間とはまこと異質な、言ってみれば古代の蜜族の営みでも見るみたいな不思議な感慨、を、或る感動と哄笑と共に催すことがある。」「大体みんな、三、四歳の時から一日平均六、七時間はピアノを弾いているのだ。例えばラフマニノフの『ピアノ協奏曲第三番』では、私自ら半日かかって数えたところでは、二万八千七百三十六個のオタマジャクシを、頭と体で覚えて弾くのである。」

この本「ピアニストという蜜族がいる」を書かれた中村絃子さんが先日亡くなられ、20年余前に読んだ著書の感動がふと甦って、改めて読み返してみました。当時の私は「クロズアップ現代」という報道番組の編集長で、音楽特にクラシックの世界とは無縁な日常でした。たまたまロシアでチャイコフスキーの書いたある曲のオリジナル楽譜が見つかった、その楽譜には一般に流布されているものとは違うフレーズが随所にある、何故そんなことになってきたのか…という「クロ現」にしては珍しいテーマを取り上げたのです。その日のゲストが中村絃子さんということで、あわてて読んだ本でした。

自由闊達で平易な表現で、ピアニスト達の奇行や奇癖を笑わせ、時に自虐的な表現でおかしきもの悲しい営みをからかいつつ、辛辣な現代社会批評をさりげなく配し、その上でなお、一音一音に心を籠め続ける膨大な時間と情熱に対する敬意と愛着がにじみ出る文章…音楽家でこれほどの文章が書ける人はそういないのではという思いを、私は「才色兼備」という言葉で脳裏に刻んできたようです。

実はその著書を読むまでは、私の中村絃子像は少し違っていました。私が高校生から大学生にかけての半世紀前に、日本のクラシック音楽界は二人のアイドルを輩出しました。

引用文献:中村絃子「ピアニストという蜜族がいる」文藝春秋(1992年)

一人がヴァイオリンの佐藤陽子さん、もう一人が中村絃子さんでした。いずれも名だたるコンクールで国際的評価を獲得し、テレビや雑誌でその美女ぶりが取り上げられて、いわゆる女優や歌手といったスターとはひと味違うアイドル的な存在になったのです。なおかつ、陽子さんは池田満寿夫という美術界のスターと、絃子さんは芥川賞を取ったばかりのイケメン作家、庄司薫と結婚します。憧れつつ我が身の落差を思い知る…青春の懐かしい一コマですが、中村絃子さんはそういう美人ピアニストだったわけです。

「ピアニストという蜜族がいる」を読んだ20年前の感慨は、そうした長い思い込みがめくれ落ちて、全身全霊をかけて音楽と向かいあいつつ、一方でそうした音楽家が希少な人種になってしまった時代を喝破する鋭い知性に出会った感動でもあったかと思います。ラフマニノフの3番、28736の音符を頭と体で覚えて弾く、パソコンもスマホも役に立たない気の遠くなるようなその作業なしには音楽家は音楽家たり得ない。速くて便利で豊かであることを優先する現代社会は、今や「蜜族」ともいうべき彼らの営みの中に何某かの意味あいを感じなくていいのだろうか…中村絃子さんは、どこかで現代社会への痛烈な批判を軽妙な文章に託しておられたと私は今思っています。

クロズアップ現代のスタジオでお会いした絃子さんは、才色兼備のもう一人のヒロコさん、国谷裕子さんと向かい合いつつ一言も理屈めいたお話をされず、チャイコフスキーの二つの楽譜の違いを弾いてお聞かせするためにやって来た…という感じでした。スタジオで滔々と論じたてるのは、蜜族・中村絃子の流儀ではなかったのでしょうか。合掌。

公益財団法人宮崎県立芸術劇場理事長 佐藤寿美

メディキット県民文化センター(宮崎県立芸術劇場)

自主事業公演チケット情報

12月25日(日) 開場14:30 開演15:00

演劇ホール

チケット発売中

矢野顕子
×
上妻宏光
二重奏

出演:矢野顕子(歌・ピアノ)
上妻宏光(津軽三味線)
ゲスト/仙波清彦
(パーカッション)

全席指定
S席5,500円[会員4,900円]
A席4,500円[会員4,000円]
U25割(A席のみ)2,000円
ペア割(S席のみ)9,000円[会員8,000円] 親子割(A席のみ)5,000円

Attention(ご注意)

- ◎記載情報は変更になる場合があります。
- ◎割引サービスの詳細は、劇場HPをご覧ください。
- ◎当日券が出る場合は、一般チケットのみ500円増(一部公演除く)になります。

11月5日(土)

①開場10:00 開演10:30
②開場12:30 開演13:00

大練習室2

11月11日(金)

開場18:30 開演19:00

演劇ホール

11月27日(日)

開場13:30 開演14:00

イベントホール

12月3日(土)

開場10:30 開演11:00

アイザックスターンホール

12月17日(土)

開場14:30 開演15:00

アイザックスターンホール

ニグリノータ公演 『赤桃』

作・演出:立山ひろみ

出演:福留麻里(ほうほう堂) 足立昌弘 高橋牧(時々自動) 河内哲二郎
全席自由 4歳未満無料 4歳以上500円 なかよしチケット700円(4歳以上2人1組、前売りのみ)

16みやざきの舞台芸術シリーズⅢ フラメンコライブ

Dos Vidas Flamencas

出演:花原千枝美、マリア・ホセ・マルティン(フラメンコ舞踏家) 片桐勝彦、千田俊介(フラメンコギター)
ミゲル・デ・バダホス(カンテ(歌)) 伊集院史朗(バルマ(手拍子)) 谷口潤実(パーカッション)
全席自由 前売2,500円 当日3,000円

Premium Select Concert#8 西の絃・ギター〜歌声と爪弾く調べ〜

出演:大萩康司(ギター) 波多野睦美(メゾ・ソプラノ/歌、朗読)

全席自由 一般3,000円[会員2,700円] U25割1,500円 親子割3,500円

パイプオルガン プロムナード・コンサートvol.153

オルガン 〜土曜日の朝はオルガンでランチを…

出演:松波久美子(パイプオルガン) 伊豆謡子(司会)

全席自由 一般(4歳以上)500円、なかよしチケット700円(4歳以上2人1組、前売りのみ)

オルガンとその仲間たちシリーズ2016

「Magnificat」〜J.S.バッハを聴く喜び〜

出演:大塚直哉(企画監修・指揮・オルガン・チェンバロ) 宮崎パッサンサンブル

一般公募によるオーディションで選ばれたソリスト オルガンとその仲間たちシリーズ合唱団
全席指定 一般2,500円[会員2,200円] U25割1,500円 親子割3,000円

お問合せ

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

〒880-8557 宮崎市船塚3-210
http://www.miyazaki-ac.jp/

TEL.0985-28-3208 FAX.0985-20-6670

Twitterとfacebook随時更新中!「フォロー」と「いいね!」お待ちしています。